

著者紹介 1993年、小学校低学年向けの「作文」「読書」「思考力」「野外体験」を重視した学習教室「花まる学習会」を設立。「小3までに育てたい算数脳」ほか、著書多数。近年、公立学校への支援にも力を入れている。

9 開かれた信頼でできる学校へ

よりよい学校づくりのための塾からの提案⑨

花まる学習会代表 高濱正伸



◆東大にて
二〇〇五年一月、東京大学大学院教育学研究科の教育研究開発機構に招かれて、「塾から見た学校 学校は必要か」という演題で講演を行った。

題名は刺激的だが、要するに公立学校の役割の重要性を示し、問題点をいくつか指摘する内容であった。最も大きな問題点は、人事制度で、「教える力のない先生には転職してもらおう」という、世の常識を早く取り入れるべきであるということを行った。

聴衆の中から手を挙げた一人は、公立学校の先生という人で、かなり批判的な意見を言われたことを覚えている。心の底から思っていることを、正直に言葉にただけだけれど、これが既得権の山が動かない現実なんだよなと妙に納得した。

ところが、全体が終了したとき、一人の男性が挨拶に来られた。都立日比谷高校の

I先生で、非常に感銘を受けたと言ってくださり、実は都立の先生同士で授業力を鍛える勉強会をやっているの、見に来ていただけないかとおっしゃった。言下に承諾したのは言うまでもない。

◆「官」が本気になる
春先、呼ばれた日比谷高校に行く、私以外に予備校の先生なども同様の依頼を受け呼ばれていた。また都の教育庁の方もいらっしゃった。

私たちの役目は、実際に日比谷高校の生徒を前にして、交代で先生方が授業をされたあとに、研究会で意見を言うことだった。そして授業を見学した私は驚いた。出てくる先生、出てくる先生、それぞれに魅力的なのである。堂々とした立ち方・声の張り・滑舌・ユーモア・専門家としての知識の豊富さ・展開の分かりやすさ……。どれをとっても素晴らしい、私自身予備校に在

籍したこともあるが、よほどこちらの先生の方が、総合的に力もあるし素晴らしいと感じた。生徒からもアンケートをとるのだが、そこには若者ゆえの辛らつな意見もありはするが、たいしては良いものを感じると評価する声に満ちていたと記憶する。

この「お呼ばれ」は翌年もあったが、やはり同様であった。都はやる気なんだなと感じたし、いわゆる「官」が本気を出すところなんだなと感じた。

その後毎年、大学入試結果において、都立高校の良い結果が出てきたが、その理由を私は身体で感じたし、当然だと思った。

◆同じ「公立」でも
それでは、小学校や中学校で、同様の「逃げ場のないオープンな授業力試しの場」など期待できるだろうか。私が無知なだけで、すでに時代は変わっているかもしれないが、いまだに聞いたことはない。

さて、この風通しの良さは、高等学校では珍しくない。埼玉県の川越高校でも二〇〇八年の三月に全校生徒を対象に、「一六歳の教科書 なぜ学び何を学ぶのか」という講演を行った。授業見学をさせていた。皆真剣に聞いてくれたし、そこで質問してくれた二年生たちが、一年後の入試で、躍進と言ってよい結果を出した。

その要因は、第一に自習室を取り仕切る女性職員を始めとする職員一丸の奮闘にあると感じたのだが、今言いたいのは、高校の先生方ともなると「塾だから、予備校だから」という偏見が、全くなく開かれていくということである。会う先生皆、自然体で一人の社会人同士として、心通じ合っている話ができる。きつと、抜き差しならない大

学入試の厳しい現実を直面させられ、実力主義を受け入れる土壌があるのであろう。ところが、小中学校に行く、どこか逃げ腰というか、のれんの向こうから顔を見せずに話をされているようにも感じること

が往々にしてある。「腹を割ってつきあう」に程遠いことがある。あるお母さんが、学校の講演会に私を呼ばたいと行ったら、校長に「営利の企業はちよつと……」と断られたと聞くことも、

一度や二度ではない。相手がトヨタの社長でも同じ言葉を使うだろうか。塾だから、なのだろう。こういうのを差別という。

◆差別のもと
差別とは、私は「無知」と「コンプレックス」がもたらす「心のカタさ」だと思っ

ている。人は本当には分かっているから、または本当は自信がないから差別する。「営利の企業はちよつと……」という校長は、世の中の株式会社、どれくらい公共性をもっていないか。塾と言った知らないのではないだろうか。塾と言ったら、合格実績一辺倒で、ぼったくりの価格で保護者を騙しているところでも思っているのではないだろうか。

ちなみに塾塾は、そもそもの成立時点から不登校などの子への対応を、医師との協力のもとに進めていたし、ADHDやLD・自閉症はもちろん、脳りよう欠損や脳腫瘍や座位もとれないような肢体不自由の子でも、一切断らずに受け入れてきた。もちろん厳しい受験実績はそれとして、保護者の納得できるものを出しつつである。顧客に「この世に存在してもいいだろう」と思っていたことは、本当に甘くない。しかも他と同じでは生き残れない。

公共性も魅力もそろわなければ、認めてもらえない。塾として成立するためには、実績だけではない、本質的意義を求められている時代なのである。

◆小中学校への要望
高校の風通しの良さのもとには、大学合格実績において、私立に抜き去られ差をつけられた公立に対して、膨大な税金が投入されているのだから結果を出せという要望・圧力があつたことは否めない。

小学校ならばどうだろうか、私立中学合格実績数だろうか。否。受験する母親たちですら、それは望んでいない。やはり友とのつきあいや集団での振舞いなどの社会性や体力など総合的な成長であろう。

しかし、学校とはまず第一に「学ぶところ」であるならば、学力においても最低限の義務課題はある。それは、読み・書き・計算を中心とした、基礎基本の学力についての「最低保証」であろう。その信頼が崩壊しているから、親たちは公立に不信感をもっている。つまり、PISA型学力だの思考力だのについては大らかでもよい、最低基準に児童生徒の学力を到達させることができない先生には、転職を願うという仕組みだけは、何としても作るべきだと思う。